

2008 年の日本の主な火山活動

【北海道地方】

知床硫黄山

9月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、北西側中腹の爆裂火口の噴気などの状況に変化はなかった。

羅臼岳

9月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、羅臼岳やその周辺に噴気は認められなかった。

摩周

3月及び4月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、カムイヌプリ付近に噴気は認められなかった。

アトサヌプリ

3月、4月及び8月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）及び7月に行った現地調査では、アトサヌプリ溶岩ドームの噴気の状態や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

1) 赤外熱映像装置による。赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感知して温度分布を測定する測器であり、熱源から離れた場所から測定することができる利点があるが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。

雌阿寒岳

9月下旬に振幅の小さな火山性地震が多発し火山性微動も発生した。10月に入り地震活動は一旦落ち着いていたが、10月中旬に実施した現地調査ではポンマチネシリ96-1火口や同第4火口では若干の温度上昇等がみられた。11月9～12日にかけて微小な火山性地震が再び増加し、11月16日には火山性微動が発生、さらに、11月17日から火山性微動が長時間継続するようになった。

そのような中、11月18日及び28～29日にポンマチネシリ火口でごく小さな噴火が発生した。噴火が発生した主要な火口はポンマチネシリ96-1火口で、同第4火口からも噴出物が放出された。雌阿寒岳で噴火が発生したのは、2006年3月21日に赤沼火口内やポンマチネシリの北西斜面で

ごく小さな噴火が発生して以来である。

上空からの観測²⁾並びに北海道大学、北海道立地質研究所、釧路地方気象台³⁾及び網走地方気象台³⁾の現地調査によると、18日の噴火による火山灰はポンマチネシリ火口の南東側数百mまで分布し、28～29日の噴火による火山灰は同火口周辺の全方向に拡がり、東側では約8km、北側では約6kmまで観測された。これらの噴火による噴出物量は約12,000トンと推定され、2006年3月21日のごく小さな噴火による噴出物量と同程度かやや多いと推定される。北海道大学の分析によると、11月28～29日に噴出した火山灰には新たなマグマが関与した証拠は認められず、これらのごく小さな噴火は水蒸気爆発であったとみられる。

12月に入り噴火は発生していないが、火山性地震の一時的な増加や火山性微動の発生はみられており、ポンマチネシリ火口の噴煙活動はやや活発な状態で推移するなど、火山活動は引き続きやや高まった状態が継続した。

2) 11月18日に北海道及び陸上自衛隊第5旅団、11月19日に北海道開発局、11月28日に北海道の協力により実施。うち、北海道の協力による観測は気象庁機動調査班が実施。

3) 気象庁機動調査班による現地調査。

十勝岳

GPSによる地殻変動観測では、2006年以降、62-2火口付近で浅部の膨張を示すと考えられる局所的な地殻変動が認められており、2008年以降も継続して観測されたが、より広域の地殻変動を示す変化は認められなかった。

3月および6月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、各火口の状態や地熱域に特段の変化はなかった。

6月及び9月に行った現地調査では、各火口の噴煙の状況や地表面温度分布¹⁾に大きな変化はなく、62-2火口の温度は、長期的にみて温度の低下傾向が継続していた。

地震活動は低調な状態で経過した。

利尻山

10月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では噴気や地熱域¹⁾は認められなかった。

たるまえさん
樽前山

3月下旬から5月中旬にかけて、火山性地震がやや増加したほかは、地震活動は低調に推移した。

5月、6月、7月及び10月に行った現地調査では、A火口及びB噴気孔群では高温¹⁾の状態が続いていた。また、1月及び3月に行った上空からの観測（第一管区海上保安本部および北海道開発局の協力による）では、山頂ドーム及びその周辺の火口の状況に変化はなかった。

山腹でのGPS連続観測では火山活動によると考えられる変動は観測されなかったが、山頂付近で実施しているGPS観測では、溶岩ドーム付近の局所的な膨張を示す基線の伸びが2006年以降継続して認められた。

えにわだけ
恵庭岳

3月及び6月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、山頂東側の爆裂火口で従来から見られていた弱い噴気が認められた。

くつたら
倶多楽

4月、9月及び10月に行った現地調査や3月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、地獄谷や大湯沼等の状況に特段の変化はなかった。地震活動は低調な状態で経過した。

2007年5月3日から大正地獄で発生していたごく小規模な泥混じりの熱湯の噴出は、その後も消長を繰り返しながら継続した（登別市による）。

うすざん
有珠山

5月、6月及び10月に行った現地調査では、西山西麓火口群及び山頂火口原の噴気や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。また、1月及び3月に行った上空からの観測（第一管区海上保安本部及び北海道開発局の協力による）では、西山西麓火口群及び山頂火口原の噴気の状況に変化はなかった。

地震活動、噴煙活動は低調な状態で経過した。

ようていざん
羊蹄山

6月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では羊蹄山に噴気は認められなかった。

ニセコ

3月及び6月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、イワオヌプリ山頂部や五色温泉付近に噴気は認められなかった。

ほっかいどうこまがたけ
北海道駒ヶ岳

山腹のGPS連続観測ではわずかな山体膨張を示す変化が認められていたが、2008年になってほぼ停止した。

5月及び11月に行った現地調査では、昭和4年火口等の噴煙の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。また、1月及び5月に行った上空からの観測（第一管区海上保安本部及び北海道開発局の協力による）では、昭和4年火口等の噴煙の状況に変化はなかった。

地震活動及び噴煙活動は低調な状態で経過した。

えざん
恵山

5月に行った現地調査では、溶岩ドーム西側の噴気の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。また、1月及び5月に行った上空からの観測（第一管区海上保安本部及び北海道開発局の協力による）では、溶岩ドーム西側の噴気の状況に変化はなかった。

10月から12月にかけて、振幅の小さな地震が一時的にやや増加したが、その他は地震活動は低調な状態で経過した。

あしまおしま
渡島大島

5月に行った上空からの観測（北海道開発局の協力による）では、山頂付近に噴気は認められず、中央火口丘の地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

【東北地方】

いわきざん
岩木山

地震活動は低調な状態で経過した。

いわてざん
岩手山

1月及び12月に山頂東側のやや深い所を震源とする地震が多くなったほかは、地震活動は低調な状態で推移した。

10月に行った現地調査及び12月に行った上空からの観測（陸上自衛隊の協力による）では、大地獄谷などの噴気の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

あきたこまがたけ
秋田駒ヶ岳

9 月に行った現地調査及び 12 月に行った上空からの観測（陸上自衛隊の協力による）では、女岳山頂部の噴気の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

地震活動は低調な状態で経過した。

くりこまやま
栗駒山

7 月に行った現地調査及び 6 月、8 月及び 12 月に行った上空からの観測（陸上自衛隊、東北地方整備局の協力による）では、湯気山、旧火口付近、ゼッタ沢、昭和湖付近の噴気や地表面の温度分布¹⁾の状況に特段の変化は認められなかった。

地震活動は低調な状態で経過した。

あづまやま
吾妻山

11 月 11 日に、吾妻山（一切経山）の噴気に関する通報があり、気象庁機動調査班が現地観測を行ったところ、大穴火口（一切経山南側山腹）で、白色の噴気が火口縁上 300m 程度の高さに達しているのが確認された。11 日以降、大穴火口からの噴気の高さは 100～400m 程度で推移した。

11 月に実施した気象庁機動調査班による現地調査や、福島県警察本部の協力による上空からの観測では、噴気の増加した噴気孔以外の場所で、地表面温度分布¹⁾等に特段の変化は認められなかった。

8 月から 11 月にかけて火山性地震がやや増加したほかは、地震活動は低調に経過した。

5 月、8 月、10 月および 11 月に大穴火口周辺で行った GPS 繰り返し観測では、2007 年 11 月以降、大穴火口付近の浅い所で収縮を示す変化が観測されていたが、2008 年 8 月頃からは、火山性地震回数の増加に合わせて膨張を示す変化が観測された。

山体での GPS 連続観測には特段の変化は認められなかった。

あだたらやま
安達太良山

6 月に行った現地調査では、沼ノ平火口の噴気や地熱域の状況に特段の変化はなかった。

地震活動及び噴煙活動は低調な状態で、地殻変動に特段の変化はなかった。

ばんたいさん
磐梯山

4 月と 6 月に振幅が小さく、継続時間の短い火山性微動が観測されたが、微動発生の前後で地震

の増加はなく、噴気などの表面現象の状況にも特段の変化は認められなかった。

11 月に行った現地調査では、山体北側火口壁及び沼の平の噴気の状況や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

地震活動及び噴煙活動は低調な状態で、地殻変動に特段の変化はなかった。

【関東・中部地方、伊豆・小笠原諸島】

なすだけ
那須岳

7 月に行った現地調査では、茶臼岳西側斜面の噴気の状況や地表面温度分布¹⁾に特段の変化はなかった。

地震活動及び噴煙活動は低調な状態で、地殻変動に特段の変化はなかった。

くさつしらねさん
草津白根山

7 月に行った上空からの観測（群馬県の協力による）および東京工業大学草津白根火山観測所と共同の現地調査で、湯釜火口内北東部に極めて小規模な噴気孔を新たに確認した。10 月に行った現地調査では、噴気孔周辺で地中温度の上昇が観測されたほか、水釜火口の北側にあたる斜面で明瞭な噴気が新たに確認された。北側噴気地帯、水釜北東斜面及び湯釜火口内北東部で実施した地表面温度分布測定¹⁾では、これまでの観測と比べ高温領域の広がりにより特段の変化は認められなかった。

地震活動は低調に推移し、噴気の状況や地殻変動に特段の変化は認められなかった。

地磁気連続観測⁴⁾では、湯釜付近の地下の温度低下によると考えられる変化が継続した。

4) プロトン磁力計による観測。火山は磁石のように磁気を帯びている。火山体内部で温度上昇があると、山頂火口の北側で全磁力値が増加し、南側で減少がみられる。

あさまやま
浅間山

8 月 10 日、11 日及び 14 日にごく小規模な噴火が発生した。山麓でこれらの噴火に伴う降灰は観測されなかった。また、8 月 9 日以降は、夜間時々高感度カメラ⁵⁾で微弱な火映が観測された。また、二酸化硫黄の放出量⁶⁾は、7 月頃までは一日あたり概ね 100 トン未満で推移していたが、8 月のごく小規模な噴火以降は 1,000 トンを超える多い状

態が続くなど、8月以降は熱活動がやや高まった状態で推移した。

地震活動は、7月頃から火山性地震及び火山性微動はやや多い状態が続いた。

10月および11月に実施した上空からの観測（利根川水系砂防事務所、群馬県、陸上自衛隊の協力による）では、火口底中央部とその周辺に高温領域が引き続き認められた。

5)長野県建設部佐久建設事務所の黒斑山設置カメラ、国土交通省利根川水系砂防事務所の山麓設置カメラ及び気象庁の追分カメラによる。

6)小型紫外線スペクトロメータシステム（COMPUSS）による。COMPUSSは、紫外線のある波長帯の二酸化硫黄の吸収を利用して、二酸化硫黄濃度を測定する。

新潟焼山

8月に実施した現地調査では、山頂部北側の地表面温度分布に高温を示す領域は認められなかった。

地震活動は低調な状態で、新潟県土木部砂防課の焼山温泉監視カメラでは噴煙活動に特段の変化はなかった。

焼岳

6月に実施した現地調査では、山頂北峰、北峰南側、東側斜面及び南西斜面（岩坪谷）の噴気の状態や地表面温度分布¹⁾等に特段の変化はなかった。

7月31日11時19分頃に「ドーン」という音を聞いたとの通報があったが、上空からの観測（国土交通省北陸地方整備局の協力による）では、噴気活動の状況に特段の変化はなかった。

焼岳付近を震源とする地震活動は低調に経過した。

御嶽山

地震活動は低調な状態で経過した。

三岳黒沢に設置した遠望カメラでは、山頂付近からごく少量の噴気が時々観測された。

GPS連続観測では、御嶽山の地下での膨張を示す様な特段の変化は認められなかった。

白山

9月に白山付近の浅部を震源とする微小な地震がまとまって発生したほかは、地震活動はおおむね低調な状態で推移した。

国土交通省金沢河川国道事務所の土砂災害監視用カメラでは山頂部に噴気は認められなかった。

富士山

地震活動は低調な状態で経過した。

箱根山

4月に駒ヶ岳の南側を震源とする地震が一時的に増加し、最大でマグニチュード⁷⁾2.6の地震が観測された。また、9月に湖尻付近と芦ノ湖北部を震源とする地震が一時的に増加し、最大でマグニチュード2.5の地震が観測されたほか、12月には駒ヶ岳付近を震源とする地震が一時的に増加し、最大でマグニチュード2.8の地震が観測された。いずれの地震活動においても、最大の地震により箱根町などで震度1を観測した。気象庁が湯河原に設置している体積歪計⁸⁾や神奈川県温泉地学研究所の傾斜計⁹⁾等による地殻変動観測に、特段の変化はなかった。

また、環境省インターネット自然研究所の箱根・大涌谷カメラでは大涌谷の噴気等に特段の変化はなかった。

12月に行った上空からの観測（神奈川県協力の協力による）では、大涌谷やその周辺の噴気の状態及び地表面温度分布¹⁾に特段の変化はなかった。

7)マグニチュード（M）は地震の規模を示す。

8)センサーで周囲の岩盤から受ける力による体積の変化をとらえ、岩石の伸びや縮みを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの注入等により変化が観測される。

9)火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの注入等により変化が観測されることがある。

伊豆東部火山群

地震活動は静穏に経過した。GPS連続観測では、火山活動によるとみられる変動は認められなかった。

伊豆大島

GPS、光波距離計¹⁰⁾及び体積歪計⁸⁾による連続観測では、2007年3月頃から再び認められた深部へのマグマ注入によると考えられる島全体の膨脹傾向が継続した。

毎月行っている現地調査では、三原山山頂火口

内及びその周辺に引き続き弱い噴気が認められた。三原山山頂火口内の中央火孔の温度や地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。

10月に、島北西部で一時的に地震が増加し、震度2を2回、震度1を3回観測した。最大の地震は1日17時00分に発生したマグニチュード⁷⁾2.6の地震で、震源に近い伊豆大島町岡田と伊豆大島町元町で震度2を観測した。これらの地震活動に伴って、体積歪計⁸⁾や傾斜計⁹⁾による地殻変動データに特段の変化は認められなかった。その他の期間は、地震活動は低調に経過した。

10)レーザーなどを用いて山体に設置した反射鏡までの距離を測定する機器。山体の膨張や収縮による距離の変化を観測している。

みやはしま 三宅島

1月7日に山頂火口でごく小規模な噴火が発生し、島の東から南東の範囲（山頂火口から約3km）で微量の降灰が確認された。また、5月8日にも、山頂火口でごく小規模な噴火が発生したが、降灰は確認されなかった。

二酸化硫黄の放出量¹¹⁾は一日あたり700～3,400トンで、依然として多量の火山ガス放出が続いている。また三宅村の火山ガス濃度観測によると、山麓でたびたび高濃度の二酸化硫黄が観測されている。

山頂火口直下を震源とする火山性地震は増減を繰り返しながらやや多い状態が続いている。空振を伴う低周波地震や火山性微動が時々発生したが、いずれも地震発生時の噴煙状況に特段の変化は認められなかった。

噴煙高度は火口縁上100～300mで推移した。

地磁気連続観測⁴⁾では、山体内部の温度低下を示す変化が鈍化しながらも続いている。

GPS 連続観測では、山体浅部の収縮が徐々に小さくなりながら継続している。

11) 三宅島では、平成 17 年 4 月までは紫外線相関スペクトロメータ（COSPEC）、同年 5 月以降は小型紫外線スペクトロメータシステム（COMPUSS）を用いて観測した二酸化硫黄（SO₂）の放出量の推移を示している。

はちしょうしま 八丈島

地震活動は低調な状態で経過した。

いおうとう 硫黄島

独立行政法人防災科学技術研究所の観測によ

ると、地震活動は落ち着いた状態で経過した。

国土地理院の観測によると、2006 年 8 月以降見られている島全体が隆起する地殻変動は、11 月末頃から鈍化しながらも継続した。

7月に実施した上空からの観測及び現地調査（いずれも海上自衛隊の協力による）では、2006 年 11 月 28 日の調査結果と比べて、島内の噴気、地熱等の状況に大きな変化は認められなかった。

ふくとくおがほ 福德岡ノ場

海上保安庁、第三管区海上保安本部及び海上自衛隊による上空からの観測では、福德岡ノ場付近の海面に、火山活動によるとみられる変色水等が確認された。

【九州地方、南西諸島】

くじゅうざん 九重山

10月に実施した現地調査では、噴気の状態や地表面温度分布¹⁾に特段の変化はなかった。

地震活動及び噴煙活動は低調な状態で、地殻変動に特段の変化はなかった。

あそざん 阿蘇山

阿蘇火山博物館に設置している遠望カメラによる観測では、噴煙は白色、少量で噴煙高度は概ね 200m で推移した。

火山性地震は、11 月に一時的に一月あたり 300 回以上に増加したほかは、概ね 100 回前後で経過した。また、孤立型微動は 3 月末から 4 月初めにかけて一時的に一日あたり 600 回以上に増加したほかは、概ね 100～300 回程度で経過した。

中岳第一火口からの二酸化硫黄の放出量⁵⁾は、一日あたり 200～800 トンとやや少ない状態で推移した。

毎月実施した現地調査では、表面温度に特段の変化は認められなかったが、中岳第一火口の湯だまりの量が 12 月に 9 割に減少しているのが観測された。

2 月 18 日には湯だまりの南側で、約 1 m のごく小規模な土砂噴出が観測された。また、3 月及び 12 月に阿蘇火山博物館の火口カメラにより中岳第一火口南側火口壁で火災現象¹²⁾が観測されたほか、12 月 23～26 日にかけて、中岳第一火口南側火口壁からごく少量の火山灰が噴出するなど、中岳第一火口内の局所的な現象が観測された。

12) 熱せられた噴出物が炎のように見える現象。

うんげんだげ 雲仙岳

12 月に行った現地調査では、平成新山の地表面温度分布¹⁾に変化はなかった。また、光波測距観測でも、火山活動に起因すると思われる変化は認められなかった。

地震活動及び噴煙活動は低調な状態で、地殻変動に特段の変化はなかった。

きりしまやま しんもえだげ 霧島山（新燃岳）

8 月 22 日 16 時 34 分頃に噴火が発生した。噴火に伴い、振幅の大きな火山性微動が観測され、同日 22 時過ぎまで続いた。噴火に伴う降灰は、新燃岳の北東側の宮崎県小林市等で確認された。

8 月 24 日に行った上空からの観測（九州地方整備局及び宮崎県防災救急航空隊の協力による）で、新燃岳の火口内の南側及び火口外の西側斜面に複数の新しい火孔が確認された。また、火口外の西側斜面には火口縁から 300m 付近まで大きな噴石¹³⁾が達しているのを確認した。

噴火後は火口縁を越える噴煙が観測されており、その高さは火口縁上概ね 100～600m で推移した。

10 月に実施した上空からの観測（鹿児島県の協力による）では、8 月と比べて火口内南側の噴気地帯の噴気の減少が確認された。

火山性地震は、8 月 19 日から、噴火の発生した 22 日にかけて増加した。その後は次第に減少したものの、11 月頃までは噴火前に比べてやや多い状態が続いた。

GPS 連続観測には、火山活動によるとみられる変化は確認されていない。

13) 噴石については、大きさによる風の影響の程度の違いによって飛散範囲が大きく異なる。本文中「大きな噴石」とは、「弾道を描いて飛散する大きな噴石」のことであり、「小さな噴石」とは、それより小さく「風の影響を受ける小さな噴石」のことである。

きりしまやま おはち 霧島山（御鉢）

地震活動は低調な状態で経過した。火口縁を越える噴気は観測されなかった。

GPS 連続観測では、火山活動に起因するとみられる変化は認められなかった。

さくらじま 桜島

昭和火口では、2 月 3 日と 2 月 6 日に爆発的噴火¹⁴⁾が発生した。2 月 3 日 10 時 18 分には弾道を描いて飛散する大きな噴石¹³⁾が 4 合目（昭和火口から水平距離で概ね 800～1,300m）まで飛散し、2 月 6 日 11 時 25 分には火砕流が昭和火口の東

約 1.5km まで流下した。4 月 8 日 00 時 29 分の爆発的噴火では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が 5 合目（昭和火口から水平距離で概ね 500～800m）まで達し、7 月 28 日の爆発的噴火では、弾道を描いて飛散する大きな噴石が 4 合目（昭和火口から水平距離で概ね 800～1,300m）まで達し、噴煙は火口縁上 3,200m の高さまで上がった。4 月 8 日の噴火¹⁴⁾以降、7 月 28 日の噴火まで 21 回の爆発的噴火を含め、69 回も噴火が発生するなど火山活動は活発な状況でした。その後、8 月と 9 月に各 1 回噴火が発生した。

南岳山頂火口では、5 回の噴火が発生し、うち 4 回が爆発的噴火であった。

4 月～6 月および 10 月以降、高感度カメラ¹⁵⁾で捉えられる微弱な火映現象が昭和火口の上空で断続的に認められた。

二氧化硫黄の放出量⁶⁾は、2 月 3 日の爆発的噴火直後に測定した際に一日あたり 2,600～3,800 トンと増加したほかは、概ね 1,000 トン程度とやや多い状態で推移した。

2 月に実施した上空からの観測では、2007 年 5 月から 6 月の噴火時よりも、昭和火口の火口縁がさらに広がっているのが確認されたほか、5 月に実施した上空からの観測では、3 月の観測時よりも火口底が深くなっており、火口縁がやや広がっているのが確認された。

国土地理院の GPS 観測によると、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下深部へのマグマ注入による膨張が引き続き観測されている。

14) 桜島では噴火活動が活発なため、噴火のうち、爆発的噴火もしくは噴煙量が中量以上（概ね噴煙の高さが 1,000m 以上）の噴火の回数を計数している。基準に達しない噴火は、ごく小規模な噴火としている。

15) 九州地方整備局大隅河川国道事務所の黒神河原上流設置カメラ等による。

さつまいおうじま 薩摩硫黄島

硫黄岳山頂火口の噴煙活動はやや活発な状態が続き、噴煙高度は火口縁上 200～600m で推移した。

4 月に実施した現地調査、11 月及び 12 月に行った上空からの観測（第十管区海上保安本部及び海上自衛隊鹿屋航空分遣隊の協力による）では、硫黄岳山頂火口及びその周辺の状況や地表面温度分布¹⁾に特段の変化はなく、引き続き熱異常域が認められた。

火山性地震はやや多い状態で経過した。火山性微動が時々観測されたが、いずれも継続時間が短く振幅の小さいものであった。

くちゅうらぶしま 口永良部島

9月に入り、GPS 連続観測で新岳火口周辺の膨張を示す変化が観測され、その後も継続している。9月2日から4日にかけて、振幅のやや大きな火山性地震が一時的に急増したほか、9月以降、火山性微動もやや多い状態で推移した。また、遠望カメラ（新岳火口の北西約3kmに設置）による観測では新岳から火口縁上20m～200mの噴気が時々観測されるようになったほか、独立行政法人産業技術総合研究所が実施した火山ガスの観測では、二酸化硫黄の放出量⁶⁾が10月に入り増加傾向を示すなど、熱活動の高まりも認められた。

9月、10月、11月及び12月に上空からの観測（鹿児島県、九州地方整備局、第十管区海上保安本部及び海上自衛隊鹿屋航空分遣隊の協力による）を行った。10月の観測では、9月の観測と比較して火口内南側火口壁で噴気の増加が認められた。その後の観測でも、さらに噴気が増加し、噴出口付近に広く硫黄昇華物が付着しているのを確認した。

すわのせしま 諏訪之瀬島

爆発的噴火が時々発生したほか、小規模な噴火が発生するなど、噴火活動は活発な状態で経過した。十島村役場諏訪之瀬島出張所によると、時々集落（^{あたけ}御岳の南南西約4km）で降灰が確認された。

火山性地震及び火山性微動は増減を繰り返しながら多い状態で経過した。

10月、11月及び12月に行った上空からの観測（鹿児島県、第十管区海上保安本部、海上自衛隊鹿屋航空分遣隊の協力による）では、御岳火口の噴煙の状況およびその周辺の地表面温度分布¹⁾に変化はなかったが、12月の観測では御岳火口内に溶岩頭¹⁶⁾を視認した。

16) 溶岩が火口底に現れたもので、諏訪之瀬島では過去の火山活動が活発だった時にも観測されている。

いおうとりしま 硫黄島

1月、5月、7月、10月及び11月に海上から行った観測では、従来から見られていた、島の北側に位置する硫黄岳火口からのごく弱い少量の白色噴気が認められた程度で、火山活動に特段の変化はなかった。